東独脱出者に関する新聞の報道について

和田洋一

一　脱出者

東独脱出者という言葉が何を意味するかは、多くの人びとにとって明白である。東独で暴動の起った年、一九五三年には三三万という多数の住民が西独に脱出し、当時の新聞はにぎやかにこれを報道した。しかし翌五四年、脱出者の数は一八万に減った。その後東独の社会主義建設の進行とともに、脱出者の数が漸減してゆけば、ウルブリヒト政権は社会主義の勝利を世界の人民の前に誇示することもできたのであるが、必ずしもそういうことにはならず、五五年から五八年までの四年間は、脱出者は二〇万を下ることはなかった。

五九年は、東独、正式にはドイツ民主共和国の成立十周年に当り、この年には数字は一四万にまで下降した。不名誉な脱出者数を、東独側は今まで決して明示することはなかったが、このときに出た宣伝出版物は、脱出者が減ってきたこと、逆に西独から東独への逃亡者がふえてきたことを指摘している。

東から西へ脱出した者は、西ベルリンのマリーエンフェルデ、もしくはギーセン、ユルツェン申告所で申告し、これ

ら申告者の総計は、西独難民省を通して公にされる。西ベルリンないし西独の新聞の中には、毎週きまった日に、一週間のトータルを発表するものもあるが、脱出者の数字が一定あるいは漸減の傾向にある場合は、ニュース・ヴァリューをもたないわけで、東独の著名人、重要な地位にある人が逃げてきた場合だけ、記事にするということになる。

六〇年も前年と同様一四万名で、一四万名というのは一日平均四〇〇名、一週平均二八〇〇名という数字である。そして六一年の一月末になると「脱出者数また上昇」という見出しが西独の新聞にあらわれ、一月の第三週は三〇八五名、第四週は三四三八名という風に記されている。この程度の〃上昇〃なら、たいして注目に値いしないのであるが、六月になると毎週のトータルが四〇〇〇名を越え始める。そしてそれとは別に、東独の食料不足、ジャガイモ、バター、チーズ、肉類の不足、その他の物資の不足が西独の新聞の紙面をにぎわし始める。七月にはいると、脱出者の数は週六〇〇〇名を越え、ただごとでないことが誰の目にも明らかになってくる。

日本の新聞では、朝日、毎日、読売、東京、ほかに共同通信がボンに特派員をおいており、中日だけは西ベルリンに特派員を常駐させている。（私自身が目を通しているのは、朝毎読の大阪版と、共同通信にたよっている京都新聞、そして時たま日経で、中日に関しては、東独脱出者の問題に関連してぜひよみたいと思っていたが、ついに機会がなかった。）毎日の出水特派員は七月十三日にボンから電報を打ってきているが、見出しは「西独への脱出が激増」となっており、「つのる東独の内部危機」というサブタイトルがついている。脱出激増の原因としては、出水特派員自身の推測ではなく、西ベルリンのマリーエンフェルデ難民申告所当局の見解が本文の中で紹介されており、第一には、東独計画経済の失敗、農業の強制的集団化のはねかえりとして食料品が不足しだしたこと、第二には、耐乏生活が引きつづき国民にたいして要求されていることなどがあげられている。

翌十四日には、朝日の東野支局長が電報を打っているが、見出しは「収容所は超満員に　東独から避難民続く」となっており、本文には「難民の流れがこのように急にふえたのは、伝えられる東独の食糧危機に加えて、もし東独が空中

輸送の管理に乗り出したら、いま最後に残されている出口も閉ざされ、もう逃げられなくなるとの恐れからであるとみられる。」とあり、食料の不足だけではなく、トールシュルスペーニク（門戸閉鎖への恐怖感）が東独でひろがり始め、それが脱出者の増加に拍車をかけているらしいことが指摘されている。

私は今ここで、東独からの大量脱出の現象を、新聞がどのように報道したかという問題を取りあげようとしているが、時期に関しては、過去十年にわたって、新聞の紙面を丹念に調べることは断念した。そして一九六一年の夏、この問題がやかましくなりだした七月十日前後から、八月十三日、東西ベルリンの交通がしゃ断されるまで、そしてその直後の数日、この期間に限定することにした。

毎日新聞は、東独からの脱出、脱出者という言葉を終始一貫つかっており、避難民という用語は避けている。私もこの例にならいたいと思うが、朝日、読売、日経、京都は、見出しでは、もっぱら避難民、東独の難民という言葉を用い、本文の中でも脱出、脱出者という言葉を用いることは極めて稀であった。しかし、人目につかないように、そおっと、そして全神経を緊張させながら、命がけで逃げてくる者を、避難民、難民と呼ぶのは、はたして適当であろうか。

オーデル川の東に住んでいたドイツ人は、終戦後、その地域を追われて、ぞろぞろと西へ移住したが、彼等こそまさに避難民、難民であった。同じく東から西への移住であっても、東独から西独への場合は、避難ではなくて脱出である。人民警察、近隣の人に気づかれないように、逃げる準備をしなければならないし、家財道具はすべて断念せねばならない。小さいカバンの中に身のまわりのものだけをいれるか、あるいは、それすらも断念して、さりげなく家を出てゆくのである。夫婦、親子がいっしょに行動すれば、怪しまれる度合いがそれだけ強くなるので、分れ分れの行動をする。ときには夫は妻に無断で家を飛び出し、西独に落ちついてから消息をよこす場合もある。東独から東ベルリン地区へはいるとき、身分証明書を見せろといわれてドキリとし、東ベルリンから西ベルリンへ無事にもぐりこめば脱出は成功で、そしてそれはどう考えてみても避難ではない。ただ脱出に成功した連中が、有名なマリーエンフェルデの収容所

に毎日五百人、千人となだれこんでくる様子をみて、難民、避難民と呼びたくなるというのは、理解できないことではない。それにしても東独の警官が、列車の乗客の中に脱出者をみつけ出そうとしているのを、〃避難民狩り〃（八月十二日の「日経」）などと呼ぶのは、整理記者の神経として、どうであろうか。

ついでながら、西独の新聞は脱出者のことを、ソビエト地域からの、あるいは東部地域からの Flüchtlinge と呼び、英米の新聞は refugees from East Germany と呼んでいる。東独からの大量脱出の現象を、旧約聖書の出エジプトと結びつけて、exodus と名付けている新聞も英米にはあり、十一年間に二七〇万の人間が、自由と繁栄を求めて西独に脱出したことを思えば、それは正しく二十世紀の exodus にちがいないが、モーセを指導者とする組織された巨大な集団の脱出と、てんでんばらばらの脱出の巨大な集積との相違は、やはり存在するといわねばならない。

二　東から西を見た特派員

七月中旬からさらに下旬にはいって、東独からの脱出者の数はますばかり、何か重大な事件でも起こりかねない情勢になってくると、毎日の出水特派員は、自動車で東独をつき抜けて西ベルリンに達した。そしてそこから送られた現地報告は「台風の目ベルリン」という題で、七月末から八月始めにかけ、七日間にわたって毎日の紙上に連載された。読売の小林特派員もその前後に西ベルリンに飛んだらしく、朝日の東野特派員は、八月十三日、東西ベルリン間の交通がしゃ断された直後に、西ベルリンに姿をあらわした。

これら三人だけでなく、英米の新聞の特派員、その他資本主義諸国の特派員たちは、常日ごろボンあるいは西ベルリンに滞在し、西独あるいは西ベルリン発行の新聞をよみ、東独に関する先入観を多かれすくなかれもたされている。いざ現地報告をかくという段になれば、ブランデンブルクの門附近の緊迫した空気の中で西ベルリン市民の表情をさぐり、マリーエンフェルデの収容所では、今、脱出してきたばかりの若者をとらえてインタービュをこころみ、東ベルリ

ン市内に入りこんで、荒涼とした印象を受け、西と東とのコントラストにショックを感じながら、ペンを走らせるというのが普通である。

われわれはこのようにして作られたルポルタージュを、今まで何度もよんできたし、そして普通の読者は別に、一方的であるとか、偏っているとか、感じないのであるが、しかしこれらのルポルタージュが、いつも西から東を見てかかれたものであり、東から西を見てかかれたものは、非常にすくないということは確かである。東から西を見るといえば、すぐ固定したイデオロギー、東独を全面的に肯定する立場で、西独を批判することだと考える人もあるかと思うが、私は日本の現実の新聞を念頭においてものを言っているので、東から西を見たジャーナリストの実例としては朝日の森恭三を考えているのである。森は一九五三年、東独に暴動が起ったときに、朝日新聞特派員としてベルリンを訪問し、その翌年改めて東独を旅行し、現在は朝日の論説委員として、また「滞欧六年」の著者として重きをなしている人である。

彼が一九五四年九月、朝日に連載した東独紀行は、みすず書房発行の「ヨーロッパ通信」の中におさめられているが、その中に次のような注目すべき言葉がある。

「東から西ベルリンに入る気持と、西から東ベルリンに入る気持とは、ぜんぜん違う。現在では二つのベルリン間の境界は、実際上はなくなり、境界線を越えても、警官にしらべられることもないが、西から東に入るときは、鉄のカーテンの彼方という、すでに一種の先入観があって、黒い色めがねをかけたように、すべてが陰惨にみえる。しかし、東にしばらく住んでみると、それなりに明るく朗らかで、結構楽しい。その気持ちで西に入ると、ゆがめられた資本主義制度といった面が、とくに印象づけられるのである。」

森恭三は、ボン特派員ではなく、欧州総局長としてながらくロンドンに滞在していた。西欧諸国の中で、イギリスは西独にたいする批判ないし不信の可成り強い国である。ボン特派員がすべてボン政府に肩をもつなどということはない

にしても、東独の問題を扱うときに、ボン特派員とロンドン特派員とでは、生活環境のちがいが、作製する原稿の上にどこかに出てくるのではないかという気がする。森は、一九五三年には、東から西へのおびただしい脱出を、西側からみていたのである。東独労働者の不満が自然発生的な暴動となり、それがソ連軍の戦車によって鎮圧されてゆくのを、彼は西ベルリンから見守っていたのである。その彼が翌年ソビエトに旅行し、かえりに東独に立ちより、そこで二週間ばかり住んでみると、それは「それなりに明るく朗らかで、結構楽しい」と感じられたのである。そして西からだけ東を見ていることにたいする反省が彼のうちにおこり、西のゆがめられた体制にたいする批判も出てきたのである。

「東ドイツでは、戦争を讃美したり、人種的偏見を植えつけたりする書物は、出版を許されないし、戦車やピストルのようなオモチャは、全然売っていない。」

「東ベルリンは、全体として確かに生活程度が上ってきた。西は上と下のデコボコが、大きくなった感じである。一年前にくらべ、東では物価が下り、西では上った。」

彼は東独を旅行しているあいだ「いかなる意味においても、自由を束縛されず、すきな人と話し、すきなところを旅行し、すきなところで写真をとった。」彼は東独の住民が、社会主義の前途に明るい希望をもって働いていることを認め、彼自身も東独の将来に何か明るいものを感じていたようである。もっとも彼が日本へかえって、「ヨーロッパ通信」を出版するにあたって、あとがきをかいたとき（一九五九年七月）には、東独観に対する若干の訂正がみられる。

「私が行ったころ、東ドイツから西ドイツへ逃げてくる難民は、主として農民であった。私の友人であるドイツ人が、西ベルリンで難民救済の仕事をしていたので、かなりくわしく実情を調べることができた。実は私は、このような難民は一時的現象で、まもなく減るにちがいない、と考えていた。この予想は、あたらなかったばかりでなく、その後、難民の質と、逃げてくる動機が、変ってきた。一九五八年の特長は、東ドイツで一番優遇されている人々――技術者、とくに医者――が逃げてくるようになったことだ。これは、時期的には、ソ連におけるスターリン主義批判のゆき

すぎ訂正につづいている。スターリン主義者ウルブリヒトのもとにおいて東ドイツは、雪どけらしい雪どけ――ハンガリーでは洪水となり、ポーランドでは堤防がきれる一歩手前までいった――もなしに、再び凍りついたかに見える。これが、東ドイツにおけるインテリの反逆の意義であろう。」

西から東を見、そしてまた東から西を見た日本の特派員は、森恭三のほかにも一人や二人はいるのかも分らない。しかし〝黒い色めがねをかけて〟西から東を見ているだけの特派員が、圧倒的に多いことだけは確かである。

三　西から東を見た特派員

新聞は公平でなければならない、一方に偏ってはならないということは、日本では、ほぼ常識になっている。二つの力が対立抗争しているときには、新聞は両方の言い分をのせねばならないということになっていて、事実それは可成りの程度に実行されている。

東独からの大量脱出という事実の報道そのものが、すでに東独にとって不利であり、弁解は困難であるように思われる。しかし東独は東独で、やはり言い分があるだろうし、その言い分を新聞はのせるべきであるし、しかも実際はのせていない。そうだとすれば、それは常識に反するのではないかという疑問が起る。

これに対する新聞社側の反論ないし釈明は、おそらく次のようなものであろう。

一、東独各地で食料品が不足して、主婦たちは毎朝いらいらしながら行列の中に立ったり、買いあさりをしなければならないというのは、東独の決定的な弱味であって、東独の民衆が物資豊富な西独へ逃げ出そうとするのは当り前であり、東独政府の言い分など、今さらきく必要はない。脱出者の巨大な数字そのものが、ウルブリヒト政権に対する民衆の無言の抗議を、客観的に証明している。

二、ボンあるいは西ベルリンの特派員は、東独の新聞にも目は通している。取りあげるに足るものがあれば取りあげ

るのだが、宣伝臭が強すぎ、一方的で、取りあげるに値いしない。

三、東独は新聞記者の自由な取材活動のための便宜を提供してくれない。森恭三の場合は、むしろ例外ではないか。

四、新聞社としては、二つの力が対立抗争しているときは、必ず両方の言い分をきいてのせるように常に心がけている。しかし、二つの力のうちの一つが共産党である場合は別である。われわれは、暴力革命を意図している政党に対してまでも、公平な取りあつかいをしようとは思わないし、する義務もない。

このほかにもまだ有力な見解があるかも分らないし、日本のすべての新聞が、今あげた四つの見解を所持しているとは限らないが、しかしイギリスの「タイムズ」などを見ていると、日本の新聞にみられない報道の仕方があることに気がつく。一つだけ例を出してみると、七月二十三日に、「タイムズ」のベルリン特派員が打った電報は「逃亡者引きつづき西ベルリンに流入」という見出しがつけられているが、日本の新聞とちがうのは、東独側の云い分に可成りのスペースがあたえられている点である。まず始めに東独からの逃亡者の数字があげられ、次に西独の全ドイツ問題相レンマアの東独政府弾がいの言葉が紹介され、次には東独の国防相ホフマンの発言、東独人民軍の機関紙「フォルクスアルメー」、東独社会主義統一党機関紙「ノイエス・ドイチュラント」などの意見が紹介されている。行数からいうと、西側のために二十四行、東側のために四十三行さいたことになっている。東独は万事秘密主義で、取材活動が困難であるという弁解を、仮に了承するとしても、「タイムズ」程度のことが出来ないという理由は、成立たないであろう。ドイツ語のできないドイツ特派員は論外として、西ベルリンに滞在していて東の新聞を手に入れることは、比較的容易だからである。

先に「タイムズ」が、西側のために二十四行、東側のために四十三行さいたと書いたので、「タイムズ」が東側にたいして可成り好意的であるらしいと感じた人もあるかもしれないが、決してそういうわけではない。社会主義統一党機関紙「ノイエス・ドイチュラント」が、東独ではここ四年間のうちに、一七〇〇万の人口にたいして三〇万三千の住居

が設けられた、とのべている言葉を紹介したあと、「タイムズ」特派員は次のような解説をつけ加えている。

「同じ期間のうちに、西独では二〇〇万以上の住居が設けられたこと、人口との比例からいうと、東独より二倍の割で住宅建築がおこなわれていることが、この記事では抜けている。この東独の機関紙はまた、東独の住民が、四四七〇万のフランス国民がもっているのと同じだけのテレビ受像機を所有しているなどと大きなことを言っている。」

「大きなことを言っている」(boast) は記者の主観であり、「この記事では抜けている」というのも記者の解説もしくは批評であって、日本の新聞倫理綱領には反するが、それはそれとして「タイムズ」特派員が、東独の言い分を紹介しようと努力していることだけは認めねばならないであろう。

次に、西から東を見てかいた日本の特派員の記事を一つ引き合いに出してみよう。そこでは特派員が自分の直感で、東ベルリン市民の表情を勝手に読みとっているのだが、その読みとり方は、正しかったかも知れないし、正しくなかったかも知れないのである。

朝日の東野ボン支局長は、八月十三日の東西ベルリン境界線しゃ断の直後、西ベルリンへ飛び、さらに東ベルリンへ入りこんだが、その時のルポルタージュは十六日の朝日の朝刊に出ている。見出しは「銃声なき戦場ベルリン」(大阪本社) で、その中からパラグラフを二つほど引き抜いてみることにする。

「駅附近の広場にはT34戦車十五台ばかりが整列して出動準備態勢をとっている。それを遠くからとり囲んで市民たちがいつまでも深刻な顔つきで見守っている。そこには東ベルリン市民の分裂した感情がある。彼らの多くは、この戦車を好意の目で見ているのではないのだ。「もう西へは行けなくなった。一生共産圏以外には出られないのだ」という閉じこめられた感情がありありと示されている。

西ベルリン市民は、こんどのしゃ断後も東ベルリンに行けるが、彼らはもう西ベルリンにはいれないのだ。「この戦車の姿を写して、西側に訴えてくれ」といわぬばかりの市民もあれば「写してはいけない」という市民もある。ウル

ブリヒト政権反対派と支持派がここでも分裂している。」

「境界線の向こうの西ベルリン市内の、平常と変らぬ外見と比べて、東ベルリン市内の厳戒ぶりはどうしたことなのか。これでは暴動も起こしようはないだろう。しかしこのような威圧的な空気の中で、国民が喜んで生産にとりかかれるかどうかは別問題だろう。」

アメリカの新聞特派員の報道も恐らくすべて、西から東を見たものであり、日本の特派員以上に「東独ざまみろ！」の気持が強く、この機会に一層の反共宣伝をやろうという気持が強く出ていると推定してまず間違いはないだろう。

「シカゴ・デイリー・トリビューン」のコールコット特派員は、朝日の東野支局長と同じ日に東ベルリン入りをし、そのときの模様を、「私は東ベルリンで恐怖を感じた」という書き出しで報道している。彼は、貿易省に用事があるといつわって東に入りこんだが、ウンター・デン・リンデンその他の通りで彼が出くわしたのは、コミュニストの兵隊と、武装警官と、戦車だけで、普通の市民は、たまに姿をあらわしたと思うと、次のしゅん間にはもう近くのビルの中へ消えてしまったと報道している。その描写は、荒涼とした東ベルリンの場景を伝えていて、説得力をもっているが、こういうルポルタージュばかりが大衆に提供されて、東から西を見た記事がほとんど全く提供されないということに、われわれが考えなければならない問題があるように思われる。日本の新聞もアメリカの新聞も、常に一方的であってはならないと心がけているはずだからである。なお、新聞写真について一言つけ加えるならば、もっとも大きな独占的威力を発揮したのは、アメリカのAP、UPI両通信社のカメラマンの仕事であろう。日本の大新聞社も、写真に関しては、すべてアメリカ通信社のお世話にならねばならなかった。ベルリンの生々しい場面をとった数多くの写真の中で、もっとも印象的なのは、鉄条網にさえぎられて、すごすごとまた東ベルリン市内へもどってゆく老夫婦の後姿をとらえたあのスナップであろう。その横には銃をかついだ、若い東独の兵士が立っている。老夫婦は向うをむいているので、どんな表情をしているのか分らないが、苦痛感、抑えられた怒り、あきらめ、絶望でその顔はおそらく正視するにたえ

ないものであろう。このすばらしい政治的効果をもった写真を、アメリカの「ライフ」誌は、二ページ全部つぶしてのせた。「シカゴ・デイリー・トリビューン」も西独の「ヴェルト」もイギリスの「タイムズ」も日本の朝日も毎日も読売も皆のせた。まさにアメリカ・ジャーナリズムの輝やかしい世界制覇である。

四　東独の新聞の報道

一九六一年の七月から八月へかけて、東独脱出者の数が日ましにふえ、週何名ではなしに、昨日は千名、今日は千二百名という風に、そしてまた昨日は今月の最高記録、今日は一九五三年いらいの新記録という風に、西独その他の資本主義国の新聞が大々的に書きたてているときに、東独の新聞は一体これをどのように報道していたであろうか。

東独の新聞については、日本新聞協会発行の「新聞研究」（一九六一年四月号）に朝広正利氏がかいており、私も八月号にかいているので、興味のある方はご参照ねがうとして私がいつも目を通している東独の日刊紙は、ドイツ社会主義統一党中央委員会機関紙「ノイエス・ドイチュラント」、週刊新聞は、〃文化政策と芸術と科学のための新聞〃「ゾンタック」であるが、「ゾンタック」は七月八月を通じて、脱出者に関する記事はただの一行ものせなかった。「ノイエス・ドイチュラント」の見出しにもFlüchtlingeという文字は、全くみられなかったが、その代りにMenschenhändler（人身売買業者）Sklavenhandel（ドレイ売買）だとか、従来の辞書にのっていないKopfjäger（首狩人）などという文字が、八月一日以後ほとんど毎日の新聞をにぎわしていた。

人身売買業者というのは、東独の住民に手紙を出したり、電話をかけたりして、西独へ逃げるように誘いかけ、成功すれば賞金が出、一方逃亡した人間は西独の労働者とは差別されて、最低の賃金でドレイのようにこきつかわれ、女は淫売婦に転落してゆく、そしてこのドレイ売買は西独の資本家によって組織的におこなわれている、西独の難民省、内務省、全ドイツ問題省等もこれに関係しているということなので、東独の国民は、こういう記事をいつも読んでいるだ

けで、どの程度の数の脱出者があるのか、新聞によっては全然知らされていないのである。正確に知らされるのは、西独から東独へ逃げてきた者の数字であり、逃げてきた者の写真は「ノイエス・ドイチュラント」に大きく掲載される。一方、西独の新聞は、東独へ逃げた者について報道しようとせず、難民省当局も「西から東へ逃げた者の総計は、五〇万に達したと東独政府は言っているが本当か？」という外国人記者の質問にたいし、「数字は確認できない」と答えているだけである。東独の新聞が、西独側の卑劣な誘拐罪を弾がいし、誘惑の手紙の全文を紹介し、東独の警察によって捕えられた五人のドレイ売買業者が裁判を受けたことを報道し、西ベルリンへ一家が脱出した直後、子供はハッと気がついて「お父さんたちは祖国を裏切るのか、ぼくは東へかえる」といって、両親を手こずらせたことについて語っているとき、日本の新聞の読者は、そのようなことについて全く知らされていない。もっとも丁寧にみてゆくと、一段見出しで「ノイエス・ドイチュラント」の記事が小さく紹介されている場合もないではない。七月二十七日の毎日の朝刊は、東独統一党第一書記ウルブリヒトが「脱出者はドレイ売買者の手に落ちてゆくのであり、われわれはこれを救ってやらねばならない」とのべたことを報道しているが、東独側が躍起になって宣伝していることも、こんな簡単な記事では、日本人には全く理解されないであろう。

ボンや西ベルリンに特派員を送っていない日本の多くの新聞は、共同通信の吾郷特派員の記事をのせ、UPI、AP、AFPの記事をのせたが、これらの報道が日本国民にあたえた印象は、東独共産主義の失敗、陰惨な東独からバラ色の西独への大量逃亡、労働力不足をおそれた東独の非人道的交通しゃ断、といったようなものであろう。東西ベルリン間の交通がしゃ断されたあと、日本のアカハタはタス通信の東ベルリン特派員の記事を掲載していたが、そこでは交通しゃ断が当然の措置であり、しゃ断されたからといって西ベルリン市民は「怒る理由もないし、怒ってもいない」とのべられている。アカハタの読者はこのような記事をよみ、一方では商業新聞に、西ベルリン市民が抗議のために二〇万人も集ったという記事、その大集会の写真、西ベルリン市民がこぶしを振りあげて東独の措置への怒りを表明してい

る写真などが出ているのをみたとき、その矛盾はどのように解決されるのか、商業新聞はウソばかり報道しているとは決して言えないはずであって、そこから出てくる一つの結論は、日本の商業新聞とアカハタ、西独の新聞と東独の新聞とのひらきが大きすぎるということである。日本の商業新聞も、森恭三の程度でやはり東から西を見た記事をのせなければならないだろうし、アカハタも、タス特派員の記事などを唐突にのせないで、アカハタの読者は同時に商業新聞をも併読していることを考慮に入れ、常日ごろから東独の新聞、西独の新聞をよく勉強して、西側の巧妙な心理作戦に対抗して、日本の読者を納得させるような記事を作ってゆかねばならないだろう。タス通信をのせたからといって、ブルジョア新聞に対抗したことにはちっともなっていない。

東独が八月十三日自衛措置として、東西ベルリン間の交通をしゃ断し、それが世界の新聞にどのような反響を起したか、「ノイエス・ドイチュラント」は、八月十九、二十日にわたって、西独、イギリス、フランス、イタリヤなどの新聞の報道、論説を紹介している。その中で、イギリスの著名な夕刊紙「イヴニング・スタンダード」のドナルド・エドガー特派員が西ベルリンから打った電報が転載されているのが、特に私の注目をひいた。エドガー記者は西ベルリン市民が二〇万集まったという大抗議集会に出席し、ブラント市長の演説をきいているうちに、心が重くなってきたとかいている。

「ブラント市長は、東独側の鉄条網・戦車、暴力的行為について、熱意をこめて語った。彼は世界に向って訴えた、〝われわれは譲らないであろう。〟

市長が市役所前で語った言葉の中には、ドイツ人の情感に訴えてくる何物かがあった。〝郷土〟だとか〝われわれの民族〟だとか〝東独の有棘鉄線の彼方にある、自らについて発言することのできないわれわれの同胞〟といった標語、これらすべては、かつてヒットラアがドイツ人のもって生れた愛国心と誇りとをまちがった方向にもっていったあの調子を思い起させた。……」

エドガー記者はまた、西ベルリンの大集会がおこなわれた翌日の新聞が、あるものは二五万人、あるものは三〇万人、あるものは五〇万人集まったと報道しているが、私は到底信じられない。私のジャーナリストとしての地位をかけてもよろしいが、あそこに集まっていたのは、せいぜい五万人前後だ、とのべている。

この報道は、私の言う「東から西を」の部類には、はいらない。しかし日本の特派員も西独に対するこの程度の批判の目を、もつべきではないか。さいごに、西独の新聞が、東独内の食料その他の物資の不足等について語るとき、それは一々具体的に報道されてはいるが、その材料をどこからどうして手に入れたか、ニュース・ソースが一向に明らかにされていない。これは日本の新聞報道の常識にも反することだし、日本の特派員は、西独の新聞にたいして今すこし警戒心をもつべきであろうと思われる。